

アプレイウス『黄金の驢馬』の ソクラテスとプラトン主義

久 喜 泰 裕

[キーワード：①アプレイウス ②『黄金の驢馬』 ③ソクラテス ④プラトン ⑤『パイドロス』]

0. はじめに

アプレイウスは北アフリカのマダウロス出身の、紀元後2世紀に活躍した人物である¹⁾。彼はラテン語で多くの作品を書いたが、『ソクラテスの神について』、『プラトンとその教説』、『宇宙論』、『弁明』、『精華集』といった著作が現存しており、とりわけ有名なのは、ラテン語の散文小説としてはほぼ完全な形で現存する最古のものとされている、『黄金の驢馬』²⁾である。この小説は、魔術に夢中の主人公のルキウスが放埒な生活をする中、魔女が梟に変身するのを真似てみると誤って驢馬に変身してしまい、そのせいで様々な苦難に遭遇するが、最後には女神イシスの秘儀によって人間に再変身し救済されるという話である。

さて、冒頭で彼を「哲学者」とも「ソフィスト」ともあえて形容していないのにはわけがある。というのも、彼は「プラトン主義哲学者」を自称しており³⁾、またそのように他の人から呼ばれているにも拘らず⁴⁾、現代

の学者たちは彼を哲学者ではなくソフィストと呼ぶべきと論じたり⁵⁾、ソフィストですらないと主張したりしているからである⁶⁾⁷⁾。そうしたものは非難や中傷に近いような論争が起こっているのは、彼の著作が哲学や文学、弁論術というように広範囲に及んでいるがゆえに中途半端であるように思ってしまうだけでなく、彼が展開した思想は中期プラトニズムに分類され、また彼が活躍した時代が第二次ソフィスト思潮⁸⁾にあたっていることも原因であるように思われる。

中期プラトニズムとは、紀元前1世紀にアカデメイアが懐疑主義から脱して積極的に教説を主張したアスカロンのアンティオコスから、紀元後3世紀に新プラトン主義を展開したプロティノスまでの間の哲学者たちを指す、現代の学者たちが作り出した便宜的な呼称である⁹⁾。『英雄伝』と『モラリア』で知られるプルタルコスなどがここに分類されるものの、現在でも「プラトン主義の浸透とともに、その通俗化を物語るもの」¹⁰⁾と評価は低い。

第二次ソフィスト思潮とは¹¹⁾、紀元後2世紀にその全盛を迎えることになる、ソフィストが活躍したアテナイ黄金期の文章を真似た文体で書く尚古主義的な流儀のことである¹²⁾。しかしながら、「無味乾燥な、内容の空虚な美文」¹³⁾、「過ぎ去りし黄金時代の語句と文体をまねただけの内容の空虚な美文」¹⁴⁾といったように、秀麗ではあるがあまりに表面的で軽薄な文学の時代として扱われている。その結果として、ただでさえ「ソフィスト」が蔑称になってしまっていることに加えて¹⁵⁾、「第二次」の呼称が「より劣るもの」というような意味合いを帯びてしまっているように見られているのである¹⁶⁾。

そうした哲学史観・文学史観を踏まえて『黄金の驢馬』を読めば、そうした悪評はますます深まることとなる。確かに『黄金の驢馬』の「アモルとプシュケ」の挿話——魂が愛とともに様々な苦難を乗り越えることによ

って神々の仲間入りを果たすという、プラトンの『饗宴』や『パイドロス』を想起させる神話——はプラトンの的に思えなくもないが、他の猥雑な話は哲学とは程遠く、娯楽小説の枠を出ないように見える。

しかし、ここ 30 年ほどで急速に中期プラトニズム及び第二次ソフィスト思潮の研究が蓄積され、そうした哲学史観・文学史観が徐々に改められつつある¹⁷⁾。アプレイウスに関しても現存する作品全体の研究が大幅に進展した。その結果として、2014 年には Fletcher が Impersonation of Philosophy という概念を提唱する立場から¹⁸⁾、そして 2015 年には Moreschini が文体論の研究を更に深めてアプレイウスをソフィストでありかつ哲学者であったのだとする立場から、アプレイウスをプラトン主義哲学者として評価する研究が提出されている¹⁹⁾。さらに、『プラトンとその教説』の失われた 3 巻と思しきテキストが出版され²⁰⁾、2020 年も早々に哲学的著作の新校訂が出版されるなど²¹⁾、ほぼ毎年のように質の高い必読書が出版されており、「アプレイウス・ルネサンス」と呼ぶべき状況となっている²²⁾。しかしながら、そうした研究はまだ本邦においては十分に受容されておらず、評価は依然として低いままである。

そこで本論文では、『黄金の驢馬』のソクラテスについて考察することで、アプレイウスの哲学について論じたい。『黄金の驢馬』のソクラテスは、この小説における最初の挿話の中で語られる、放埒のゆえに魔女メロエによって絶命させられるキャラクターである。私たちが「ソクラテス」と聞いたとき普通想像するのは、対話相手を吟味し無知を暴く、プラトンのソクラテスであろう。だが、プラトンのソクラテスと問題となっているアプレイウスのソクラテスはあまりにも隔たっている。しかも、人間が驢馬に変身してしまうというプロット自体はアプレイウスのオリジナルなものではなく、既に存在していた話にアレンジを加えたものだと明らかになっている²³⁾。それでは、アプレイウスは『黄金の驢馬』でソクラテスと

いう名の人物を登場させることで、何を表現したかったのだろうか。実は、この哲学的関心を引くこの問題について扱った研究は多くはない。これまで等閑に付されてきたこの問題を通じて、アプレイウスはプラトン主義者なのかどうか、さらにはプラトン主義哲学者なのかどうかについて、1つの仮説を提示したい。

1. アプレイウス『黄金の驢馬』のソクラテス

『黄金の驢馬』に登場するソクラテスについて確認しよう。彼は高齢の魔女メロエの誘惑に抗えず籠絡されてしまうが、彼女が魔女であることがわかると逃亡する。しかし彼女に殺害されて魔術によって生ける屍とされた後、結局息絶えてしまい埋葬される。その様を彼の友人アリストメネスが主人公ルキウスに語るのである。この『黄金の驢馬』における最初の挿話は、通常は主人公ルキウスの不吉な未来を予期し²⁴⁾、また警告するものとして解されてきた²⁵⁾。ルキウスは居候先の女中フォティスと恋仲になって、彼女から魔術を教わるが失敗して驢馬に変身してしまい、そのせいで辛酸を嘗めることになるのである。

この放埒なソクラテスは、たとえば『饗宴』216D でアルキビアデスに節制に満ちている人だと言われるプラトンのソクラテスらしくはない。ましてや、魔術のせいで喉元から海綿がこぼれ落ちて絶命し川へと転落しようとする様は、「もっとも善く、もっとも叡智に富み、もっとも正しい人の最期」²⁶⁾ だと思えるはずがない。確かにどちらも死因は飲むことによってではあるが²⁷⁾、一方はワインに溺れた生活を送った後に川の水を飲むうとして、もう一方は死刑判決の後に脱獄を拒否した後に、魂の不死を語って毒薬を飲むのである。この点からプラトンの要素を取り出すのは困難である。このギャップを私たちはどのように解すればよいのだろうか。

このソクラテスを、ギリシア喜劇から連なるローマ諷刺の伝統から解釈

しようという試みがある²⁸⁾。プラトンのでも、クセノポンのでもないなら²⁹⁾、アリストパネスのソクラテスから解釈しようというわけだ。喜劇作家ではあるが、だからといって彼を軽視するわけにはいかない。というのも、プラトンとクセノポンがソクラテスの死後に弟子として著作を書いたが³⁰⁾、他方でアリストパネスはソクラテスが存命の時に『雲』を書いた。その意味で唯一の同時代の資料を残したと言えるからである。とはいえ、アリストパネスのソクラテスは、歴史上実在したソクラテス個人をパロディしているというよりは——実在したソクラテスを全くどの点においても反映していないとまでは言えないが——、当時の新興知識人、つまり弱論を強弁することを教えるソフィストや、天空のことや地下のことを探求する自然学者などといったさまざまな要素が付されているキャラクターだと解するのが穏当であると思われる³¹⁾。他方でローマ人が発明した諷刺詩においてもその扱いは同様で³²⁾、ソクラテスという特定の個人が扱われているというよりむしろ哲学者の象徴としてその名が扱われているに過ぎない³³⁾。

テキスト上の問題ではどうだろうか。アプレイウスのソクラテスを誘惑するメロエはテッサリアの魔女であるが、テッサリアの魔女への言及が『雲』749の中に確かに見られるのである。しかしながら、そのことはアプレイウスがアリストパネスのオマージュだけを意図していることにはならない。というのも、プラトン『ゴルギアス』513Aにもテッサリアの魔女への言及が見られるからである。それゆえ、もしアプレイウスがテッサリアの魔女の着想を得たのが『雲』からだと考えられるのであれば、それと同程度に『ゴルギアス』から着想を得ていると考えることも可能になってしまう。

もちろんアプレイウスが『ゴルギアス』を読んでいたかどうかは定かではない。しかし、他のプラトンの作品に親しんでいた可能性は十分にある。

『黄金の驢馬』のソクラテスが完全に息絶えるシーンは、『パイドロス』の一節を思い起こさせるものとなっている³⁴⁾。

「ほら」と私は言います、「君に朝食が用意されているよ」と。そして私はこう言って私の旅行袋を肩から外し、チーズをパンと一緒に彼に差し出し、そして「あのプラタナスのすぐそばで (*Iuxta platinum istam*) 腰を下ろそう」と述べるのです。…ですがあの人は、十分に食べ物ががつがつ喰らった結果、我慢できないほどに喉が渇き始めてしまいました。というのも、最上のチーズの大部分を貪欲にむさぼり食ったからでして、プラタナスの根 (*radices platani*) からさほど遠くないところで穏やかな小川が静かな沼の姿で緩やかに流れていました。色では銀やガラスと競い合うような流れです。(『黄金の驢馬』1.18.8-1.19.7)

ヘラにかけて、この憩いの場所は確かに美しい。事実また、枝を広げるプラタナス (*πλάτανος*) の高いこと、またアグノスの濃い影をなす高さは実に美しい。そして、アグノスは花盛りの最高点にあるので、この場所をできるかぎり最も芳しくするだろう。またさらに、最も優雅な泉がとても冷たい水で流れているよ、少なくとも³⁵⁾ 足で判断する限りでは。誰かニュンベたちやアケロオスの神聖な場所だと、少女像や神像からは思われる。さらにまた、風通しのよさがなんとも心地よくとても気持ちがいい。それが夏らしくそして高い音で蟬たちの歌声に響き渡っている。だがすべてのことのうちで最も素晴らしいのは、この草のことだ。なぜなら穏やかな傾斜にあるので、横になった人にとって実に心地よく頭を支えてくれるのに十分なくらい生えている。(『パイドロス』230B-C)

これらのいずれのシーンにも、プラタナスの樹と川のモチーフが現れている。そして2人のソクラテスはともに川を渡ることを制止されていたのである。

そしてその傷口を、それが最も広く開いていたところに、海綿で塞いでパンティアは語ります、「ほら、海綿さん、あなたは海で生まれたのだから、川をとって向うに行くのはお気をつけなさい」と。（『黄金の驢馬』1. 13. 7）

良き人よ、ぼくがその川を渡ろうとしたまさにそのとき、ダイモンの合図、いつもぼくに現れていた合図が現れたのだよ——それはぼくが行おうとすることをいつも引き留めるのだけど——、そしてぼくには思われたのだ、そこから何か声のようなものが聞こえて、その声は罪を浄めるまでは立ち去ってはいけないとぼくを命じていて、なんとぼくが神的なものに対して何か過ちを犯してしまったから、とね。（『パイドロス』242B-C）

前者のソクラテスはすでに心臓が取り出されて生ける屍にされてしまった場面で言われていて、後者のソクラテスの状況とは異なっている。だが、『黄金の驢馬』のソクラテスは魔女パンティアによって、『パイドロス』のソクラテスはダイモニオンの合図によって川を渡ることを抑制される。川を渡ることの禁止という点では明らかに共通しているのだ。とはいえ、これらの一致は偶然であるように思う人もいるかもしれない。

しかし『パイドロス』以上に2世紀までのギリシア教育の「文化的シラバス」においてより確かに根付いている作品はほとんどない³⁶⁾というくらいこの作品は人口に膾炙していた。『パイドロス』をラテン語に翻訳し

たアプレイウスが、さらには『パイドロス』を読んでいて³⁷⁾、それを自身の創作のネタにしたというのは十分あり得る。それに加え、彼は『ソクラテスの神について』の中でこの『パイドロス』のエピソードについてかなり具体的に語っているのである。

このような種類の「ダイモニオンが禁止するために現れる」状況において、神の力によって現れる何か声のようなものを聞くと、彼「ソクラテス」は語っていたのであり——というのもそのようにプラトンの作品にあるからなのだが——、至るところで話しかけてくる前兆を彼が追い求めたのだとは誰も考えてはならない。さらに、確かに見る人たちが遠く離れていてパイドロスただ一人と一緒に街の城壁の外にいて、樹のとある暗い影の下であの伝達のしるしに気づいたのだ。非難によって憤慨しているアモルを歌い直すことによって宥めるより先にイリソス川の穏やかな流れを³⁸⁾ 渡ってはならない。(『ソクラテスの神について』19.4)

アプレイウスが「歌い直すことによって (recinendo)」という表現で指しているのは、もちろん『パイドロス』の核心部である「取り消しの歌」のことである。

そして取り消しの歌と呼ばれる詩 (τὴν καλουμένην Παλινφθίαν) をすべて語り終えると「ステシコロスは」視力を回復したのだ。そこでこのぼくはこの人たち「ホメロスとステシコロス」よりも、少なくともまさしく次の点においては賢明であろうとするつもりだ。つまりね、エロスへの非難ゆえに何かされるよりも先に、その神に取り消しの歌を捧げることを試みるつもりなのだ。頭を出して、ちょうどさっきのよ

うに恥ずかしさのゆえに衣にくるまったりせずに。（『パイドロス』
243B）

以上を踏まえると、アプレイウスはむしろ明らかに『パイドロス』の逸話を
知りながら、『黄金の驢馬』の中でソクラテスという名の男を変死させ
たことになる。これはいったいどうしたことだろうか。

この謎を解くために注目すべきなのは、『黄金の驢馬』では植物が一種
欠けていることである。アプレイウスが『パイドロス』を読んでいたの
であれば、彼がこの樹をあえて省略していることに何らかの意味があるこ
to become になるだろう。アプレイウスは『パイドロス』の状況描写を『黄金の驢
馬』の中に改作するにあたって、アグノスを削除することで、川の周りの
植物に変更を加えているのである³⁹⁾。古代においてこの植物には性的興
奮を抑制する効果があるとされおり⁴⁰⁾、ルネサンス・プラトニストのフ
ィチーノが注釈しているように⁴¹⁾、この植物はソクラテス的な真の愛を
象徴するものとして、そして以後の話を貞節をもって聴くべきであるこ
to become 事を暗示するものとして扱われてきた。

もちろん幾人かの注釈者たちが述べているように⁴²⁾、現代においてま
で『パイドロス』のこの箇所の読解にアグノスの効用を読み込むというの
はさすがに深読みのしすぎだろう。しかしながら、古代における『パイ
ドロス』のオマージュであればその読み込みは有用である。性的興奮を減衰
させるこの植物の欠如は、ソクラテスが放埒になってしまったことを暗示
している。紀元後2世紀の文学において『パイドロス』が無視できないも
のとなっていたのだとすると、アリストメネスによって語られるこのソク
ラテスの挿話は明らかにこれをオマージュしていることになろう。この
『黄金の驢馬』のソクラテスは、ダイモニオンの声を聞くことができず、
川を渡ってしまったソクラテスなのだ。このことは、古代におけるアレン

ジであるがゆえに、より効果的に機能していると言える。

ではなぜこのソクラテスはダイモニオンの声が聞こえず、川を渡ってしまったのだろうか。ある補助線を加えることで理解できるようになる。ソクラテスと人相師ゾピュロスの逸話である⁴³⁾。この話を最初に報告するのはエリスのパイドン——プラトンの『パイドン』においてソクラテスの最期の対話を報告する人のモデルである——が書いた対話篇『ゾピュロス』だと言われている⁴⁴⁾。この作品は残念ながら現存しておらずその全容を知ることにはできないが、キケロやアプロディシアスのアレクサンドロスの報告からその概要をある程度知ることができる⁴⁵⁾。彼らの報告を総合すると、以下のようなものだ。

人相師のゾピュロスは体つきや顔つきから人間の性向を見抜くことができる」と豪語していた。そしてその能力でソクラテスは愚鈍で女好きな人であると判定した。しかし周りの人たちは——とりわけアルキビアデスは最後の点について——そうした欠点がソクラテスに認められないので大笑いした。しかし、ソクラテスはゾピュロスは間違っていないと助け舟を出す。曰く、生まれつきそうした欠点を持っていたけれども「理性の力 (rationality)」⁴⁶⁾、あるいは「哲学の訓練 (τὴν ἐκ φιλοσοφίας ἀσκησιν)」⁴⁷⁾によってそれを払いのけたのだ、と。納富はこの逸話について、「肉体が持つ欲望や醜い性格は、魂によって打ち負かされる。パイドンの『ゾピュロス』は、哲学者ソクラテスの姿をそう描いた」と述べている⁴⁸⁾。この逸話は哲学の勧めに主眼を置いたものである⁴⁹⁾。紀元前1世紀のキケロも紀元後3世紀のアレクサンドロスも言及しているのであれば、この逸話は十分に浸透していてアプレイウスが知っていたことも十分にあり得る。

この逸話を考慮に入れると、アプレイウスは『黄金の驢馬』のソクラテスが魂が弱く放埒なままだった場合のソクラテスとして描いたと考えられる。生来持っていた欠点を、鍛錬して克服することをしなかったソクラテ

スを仮定して、自身の小説の中に登場させているように思われる。

そしてここで再考したいのが、そのソクラテスがテッサリアにいたという事実である⁵⁰⁾。テッサリアの魔女に魅了されたということ以前に、ソクラテスという名の人物がアテナイ以外の場所にいるということがそもそもあまりに場違いなのである。なぜなら、アテナイのソクラテスは兵役以外ではアテナイ以外を訪問することはなかったからである⁵¹⁾。

ではソクラテスがテッサリアに行ったとしたらどうなったのだろうか。プラトンは次のように法律に仮託してソクラテスに語らせる。

しかし、お前は以上の場所〔テバイとメガラ〕を去って、そしてテッサリア⁵²⁾へ行きクリトンの客人筋に身を寄せるつもりかね。なぜなら、まさにそこでは無秩序と放埒が最も幅を利かせているからな。そしてきっと彼らは喜んでお前から聞いてくれることだろうよ、何かしらの衣装を着用して、皮衣なり、脱走者たちがきまって身にまとうようなまさにそういった他のものなりを身につけて、お前自身の姿を変えて、お前が牢獄から滑稽にも脱走する、という話を。（『クリトン』53D）

プラトンのソクラテスはテッサリアには行かなかった。しかし、もし仮に行ったとしたら、無秩序と放埒の世界が待ち受けていた。そしてその姿は脱獄者に相応しいものになってしまう。『黄金の驢馬』のソクラテスはどうかであったか。アリストメネスは彼との再会の場面を次のように語る。

そういうわけで、私は無駄に急いだせいで疲れてしまったので、ちょうど夕暮れ時の星があがるところで風呂場へと出発しました。するとなんてことでしょう、私の旧友であるソクラテスを私は見つけます。

彼は地面に座り込んでいましたが、ボロボロの外套では体を半分しか覆えていません。青白くなっていてほとんど別人です。惨めに瘦せたせいで姿を変えられてしまって、フォルトゥナに見捨てられた、道端にいるいつも物乞いをする人たちのようでした。(『黄金の驢馬』1.6.1)

アリストメネスの友人であるソクラテスは、乞食同然の身なりになってしまっていた。このアリストメネスによる外見の描写は、『クリトン』に見られるテッサリアへと逃亡した場合のソクラテスと重なり合う。

では脱獄以外の方法でアテナイの外に出る場合はどうだろうか。『ソクラテスの弁明』では、有罪判決が確定した後の量刑の場面において迎賓館での食事を提案したあと、罰金刑と禁固刑を拒否し、更に国外追放について次のように語る。

それから、おそらくこう言う人がいるかもしれません。「ソクラテスよ、君は追放になって、私たちのために、黙って平穩に生きていくことはできないのか？」と。まさしくこの点が、皆さんのうち一部の方々を説得するのに、最も難しい点なのです。もしも私が、「それは神に従わないことを意味していて、それゆえ平穩に過ごすことは不可能なのです」と言い張っても、あなた方は、私が空とぼけていると考えて、私の言うことを信じはしないでしょうから。また、もし私が、今度はこう言ったらどうでしょう。「徳について、また私が対話しながら私自身と他の人々を吟味しているのを皆さんが聞いているような事柄について、毎日議論すること、これはまさに人間にとって最大の善いことなのです。そして吟味のない生は人間にとって生きるに値しないのです (ὁ δὲ ἀνεξέταστος βίος οὐ βιωτὸς ἀνθρώπῳ)」と。こう言ったと

しても、あなた方は、私の言うことをさらにいっそう信じないことでしょう。（プラトン『ソクラテスの弁明』37E-38A）

プラトンのソクラテスは、「ソクラテス以上の知者はいない」というアポロンの神託の真意を探るためにアテナイ市民を吟味する哲学活動を開始した。それゆえ、そうした哲学活動を止めることは、神の命に背くことになってしまう。そして対話と吟味なしに生きることは生きるに値しないとまで公言する。

このソクラテスの裁判について、『黄金の驢馬』の主人公ルキウスは熟知している。パリスの審判の演劇を見て、人間の判断は誤ることがあまりに多いことを批判しながら次のように語る。

さらにまた、どのような種類のものだったでしょうか、賢明な立法者でありすべての学識の先達であるかのアテナイ人たちのものの判決とは？ 神のごとき予見をもつ老人は——彼をデルポイの神はすべての死すべき人間たちに知恵において差し出したのですが——最も邪悪な党派の欺瞞と憎悪によって青年を墮落させる者だとして不当な告発をされることで——実際は青年を抑制でもって制限していたのに——、有罪による有毒な植物の汁によって殺されたのです。その市民たちに永遠の不名誉の汚点を遺したのではないですか？ 今日でも依然としてすぐれた哲学者たちが彼の最も高潔な学説を好み、そして幸福の究極の探求においては彼自身の名前に誓うにも拘らず？ ところで、実際誰かが私の義憤の激しさをとがめる方がおられるかもしれません、自分自身で次のように考えながら、「ほら、いつまでロバが我々に哲学講義するままにするつもりなのか？」と。閑話休題、脱線したところから話に戻りましょう。（『黄金の驢馬』10.33.3）

ここではソクラテスの名前が明言されているわけではないけれども、幾つかのキーワードによって明らかにアテナイのソクラテスのことを指すのだとわかる。アプレイウスはソクラテスのことを、おそらくほとんどプラトンを通じて、かなりわかっていた。だが、彼以外のヘラクレスやパラメデス、アイアス、オデュッセウスは名前が明示されているのに対してソクラテスの名前が出されていないのは意図的であろう。ここでソクラテスと明言することができなかったのは、この小説の中で同名の人物が悲惨な最期を迎えているので、その混同を防ぐためであろう。それにも拘らずここでアテナイのソクラテスを称えるのは、作者であるアプレイウス自身も崇敬する人物と同名の人物を惨めな様で殺害してしまったことへの贖罪といえる。ここにはアプレイウス流の「取り消しの歌」が確かにある⁵³⁾。

このソクラテスについて、May は上記の『パイドロス』や『クリトン』との関連を指摘しつつも、「この小説におけるプラトンのほのめかしは、真剣な哲学的メッセージを筋書きに付け加えるとは意図されていない」と述べ、「彼〔アプレイウス〕はよくわかっている読者によってプラトンの文脈に違反していると判断され得る」と結論付ける⁵⁴⁾。確かに、『黄金の驢馬』のソクラテスは、プラトンのそれとは状況描写が一部類似していたとしても、その性質は全くもって哲学的ではない。だがむしろ、これだけあえて上手に違反させ続けるのはプラトンを熟読していたことの証左である。これまで見てきたように、アプレイウスは相当にプラトンを読み込んでいる。単に風刺やパロディで茶化すためだけにしては詳しすぎる。もし仮に哲学者の象徴であるソクラテスを風刺するのであれば、当時のローマではすでに忌避されていた同性愛で告発すれば済む。だが実際にはアプレイウスはそういったことは行わない。その学識をちりばめながら、彼は自分の小説の中でソクラテスを全く哲学的でない人物として描いた。それは、

プラトンだけでなく、パイドンの対話篇『ゾピュロス』から想像される、持って生まれた愚劣さを克服できなかった場合の、フィクションのソクラテスである。アブレイウスのソクラテスは故郷を捨ててテッサリアへ行き、最も放埒で無秩序な生活を送った。そして魔女に魅了されて結局恨みを買って、生ける屍にされる。そしてダイモニオンの声を聞くことができず、川を渡ってしまい、そのせいで完全に息絶えた。プラトンの文脈に乗せると、これらはすべて、哲学をしなかったこと、とりわけ自身を吟味しなかったせいである。このソクラテスはまさしく「生きるに値しない」生を送っていた。ソクラテスという名前が哲学者を作るわけではない。哲学をしなければ、ソクラテスさえ生ける屍も同然なのである。だからこそ、人は誰でも哲学に励まなければならない。実はこのソクラテスもまた、反面教師として「哲学のすすめ」を行っているのである⁵⁵⁾。

『黄金の驢馬』のソクラテスは、哲学者ソクラテスと真逆であるがゆえに、逆説的に「哲学のすすめ」を行っている。このソクラテスは、『ソクラテスの神について』や『精華集』のような演説の中に登場すれば、あまりに滑稽に映ったことだろう。だがそうではなく、小説という創作の枠組みの中でこそ実現し得たのである。

2. 『黄金の驢馬』序文とプラトン『パイドロス』

アブレイウスは小説の中にプラトンのソクラテスに独自のアレンジを加えたものを登場させ、「哲学のすすめ」を展開した。だが、これは手が込んだ表現であって、彼の演説と小説を比較してようやくかろうじて意図が見えてくるものであった。では、なぜ表現方法を変えるのだろうか。そして、なぜ演説で語るときにはばかばかしく思えるのに、小説の中ではそれが薄れるのだろうか。

アブレイウスは書くことと話すことについて熟慮していたからという

のが、恐らく1つの答えとして与えられるだろう。この問題について、『黄金の驢馬』の序文に若干の考察を加えることで検討していきたい。

僅か百数語程度から成る『黄金の驢馬』1.1.1は多くの難問が存在することが指摘されてきており、例えば2001年にこの序文に対してのみの論文集が出版されたが、全部で24章、索引を含めると325頁にも及ぶ論文集が編まれるほどである⁵⁶⁾。そうした余多の難問を抱えるこの序文に対して本論文であらゆる面から論じることとはできない。そのため、アプレイウスのプラトン主義及びプラトン主義哲学について論じるために、本論文では書かれた言葉の批判を含んでいるプラトン『パイドロス』との関連に絞って考察することにする。

小説『黄金の驢馬』は次のように始まる。

ですがこの私はあなたのためにかのミレトス風の物語でもって種々の話を織り合わせましょう、そしてあなたの好意的な耳を魅力的なささやきでもって魅了しましょう。ただもしナイルの葦のペンの明敏さによって書き込まれたエジプトのパピルスを見るのを軽んじないでください。人間たちの姿と命運が、別の形に変えられ、そして再び自身へと互いに絡み合う結び目によって元に戻るという話を、あなたが驚くように、私は始めます。「彼は誰ですか？」少ない言葉でご理解ください。アッティカのヒュメトス山、エピュラのイストモス、スパルタのタイナロス岬、より名誉な書物によって永遠に保たれる名誉な地、それが私の古い故郷です。(『黄金の驢馬』1.1.1-3)

この序文は「耳 (aures)」や「ささやき (susurro)」といった話し言葉を想起させる語が用いられる一方で、それらと同時に「葦のペン (calami)」や「パピルス (papyrum)」といった明確に書き言葉を指す語が用い

られている。それゆえに、この序文は音読されるのと黙読されるのとどちらを前提としているのか判然とせず、話される言葉と書かれた言葉の融合してしまっているようにすら見える。ここで進行しているのは、『パイドロス』でリュシアスの演説をパイドロスが読み上げたり、『テアイテトス』の冒頭でエウクレイデスが奴隷少年に書かれた対話を読ませたりすること以上の複雑なものである。

Trapp はこの序文と『パイドロス』の関連を指摘している⁵⁷⁾。すなわち、(1) エジプトを文字の起源としている点、(2) パピルスの巻物は葦によって書き込むものであるという点、(3) 『黄金の驢馬』の序文の語り手と『パイドロス』のソクラテスとが書かれた言葉は注視に値するかを問題としている点、そして (4) 序文の「明敏さ」という表現が、ソクラテスによる神話に登場する文字の発明者であるテウトの賢さを思い出させる点である。しかしながら Trapp は両著作を同盟関係ではなく敵対関係にあるものとしてとらえることを提案する。というのも、序文の語り手は、『パイドロス』とは対照的に、読者が書かれた言葉の魅惑から離れるようには論じていないからである⁵⁸⁾。

他方で Kirichenko は Trapp の論点をさらに広範なものとする。まず、序文に続いて主人公ルキウスがテッサリアを訪れるシーンに注目する。

テッサリアを——といいますのも、私どもの母方の家系のもととここでして、これはかの有名なプルタルコスと、後にその甥である哲学者セクストスによってもたらされたので、私たちの自慢となっているのです——そのテッサリアを私は仕事のため訪れようとしていました。
(『黄金の驢馬』1.2.1)

ここで現れる2人の哲学者の出身地がテッサリアに帰されるのは、実は奇

妙なことである。というのも、両者とも実際の出身地はポイオティアのカイロネイアであるからだ⁵⁹⁾。それゆえに、アリストメネスの挿話のソクラテスだけでなくこの2人もまた仮想の人物とされてしまっているのである。このことから Kirichenko はテッサリアを史実の土地ではなく専ら文学の舞台、魔術の土地としてとらえる⁶⁰⁾。

さらに『黄金の驢馬』の序文の語りを分断する「彼は誰ですか? (Quis ille?)」とその直後の言葉に着目する。序文の語り手は「ですがこの私はあなたのために (At ego tibi) …」と語り始める⁶¹⁾。だがその語りはすぐに「彼は誰ですか?」という言葉によって中断されてしまう。ここで「彼」と言及される人物は、直後に自身の出自について語りだす。その様子の中に Kirichenko は、『パイドロス』においてソクラテスが指摘する若者の態度に対する迎合を見出す。

「ソクラテス、あなたという方は、エジプトの話でも、どこであれあなたが望みの他の場所の話でも、かんたんにお作りになりますね。」
「だがしかし、友よ、ドドネのゼウスの神殿にいる人たちは、最初の予言は樫の言葉だったと言っていた。じっさい、当時の人たちは、君たち若者のように賢くなかったから、樫と岩から聞いて単純さによって満足したのだよ、それらが真実のことだけを語っていればね。だが君にはおそらく、誰が言っていてその人がどこの国の人なのかのことが大事なのだ。というのも、次のことだけを君は考えているのではないからね、それがそのとおりなのか、別様であるのか、だけを。」(『パイドロス』 275C-D)

パイドロスに象徴されるような若者は真実がどうあるかよりもむしろどんな人物が語っているかを気にしてしまう。彼のような人物に向けて、「彼

（つまり、語っている人）は誰ですか？」という問いに対して、自身の出身地を語りだすのである。

いずれの学者も『黄金の驢馬』の中にはプラトンの『パイドロス』における哲学をパロディするもの以上のものを見出そうとしていない。確かに書かれた言葉を批判する『パイドロス』の文脈とは相容れないように見える。

しかし『パイドロス』を精読すれば、『パイドロス』は書かれた言葉を完全に排除しているわけではないことがわかる。『パイドロス』は書かれた言葉は遊びに相当するとしながらも、その遊びの中には「立派な遊び」となるものもある。

「あなたが言っているのは、くだらない遊びに比べて、本当に立派な遊び（παγκάλην... παιδιάν）ですね、ソクラテス。正義やあなたがおっしゃっている他のものどもについて物語を話しながら、言論の中で遊ぶことのできる人の遊びというのは。」（『パイドロス』 276E）

パイドロスのこの発言にソクラテスは同意する。『パイドロス』は書かれた言葉にも「本当に立派な」ケースがあると規定している。朗読されることも黙読されることも両方とも想定し、それらを相互に乗り換えるかのような序文は、言葉遊びをつくしているかのである。その一方で、『黄金の驢馬』 10.33 に見られるように、放埒なソクラテスを「取り消す」ものであり、そして正しいソクラテスについて語るものであれば、この「本当に立派な遊び」に該当するものとみなされ得るように思われる。

また、ソクラテスについて語る場合、プラトンと、アプレイウス及び私たちとは構造上致命的な断絶が存在している。この中でプラトンだけがソクラテスを直接見聞きしただけではない。プラトンがソクラテスを語る

とき、既にプラトンは、存命の人物としてはもちろん、テキストの中にも、存在しない。プラトンは、存在しない人の身分でソクラテスについて語っているのである。

その一方で、アプレイウスは私たちと同じ構図を共有している。つまり、聴衆からすれば「アプレイウスがかくかくしかじかと語っている」、アプレイウスからすれば「私が語っている」という構図からは逃れられない。だが、アプレイウスは『黄金の驢馬』のほとんどをルキウスに語らせているように、小説は、それが音読されるのであれ、黙読されるのであれ、少なくともこの「私が語っている」という構造からは抜け出すことができるのである。なぜなら、『黄金の驢馬』の中には、アプレイウスは存在しないからだ。

こうした態度は、『パイドロス』における「哲学者」の定義から検討され得る。この著作の最後の一節では、ソクラテスとパイドロスにとっては「言論についてのことは十分に遊ばれつくした (πεπαίσθω … τὰ περὶ λόγων)」とされた後、真なるもののありかたを知っていて、書かれた言葉が劣っていることをわかっていてそれを助けることができる人に対する肩書が論題となる。

パイドロス「では、あなたはどんな肩書をその人にあてますか？」
ソクラテス「パイドロス、一方でその人を知者と呼ぶことは大きすぎるし、神にのみ相応しいのだと、少なくともこのぼくには思われる。他方で、愛知者や何かそういったものがむしろ、その人に調和し、より調子が合っているだろう。」

パイドロス「はい、全くやり方を外していません。」(『パイドロス』278B-D)

アブレイウスは小説を作った。その意味で作家、作り手（ποιητής）であることは否定しようがない。しかし、こうした構造に自覚的であったからこそ、語り方を変身させているのではないか。そして『黄金の驢馬』を助けるものとして、演説を行った。アブレイウスは話される言葉においても、書かれた言葉においても、哲学のすすめを行っている。そしてそのように理解すれば、アブレイウスは作家よりむしろプラトン主義哲学者であると——プラトン主義的な教説を保持するのではなく、プラトンが用意するものに類似する周到的な仕方の点で——、私たちは正当に呼ぶことができるのではないか。

注

- 1) アブレイウスの伝記については、Harrison (2000), 1-38 や水落 (2006c)、国方 (2008)「作品解説 アブレイウス」が詳しい。
- 2) アブレイウスの著作のそれぞれの邦題は、邦訳が既に刊行されているものについては最新のものに従い、*Florida* については邦訳は出版されていないものの本間が研究ブログ (https://researchmap.jp/blogs/blog_entries/view/87563/ae07a314bcf035b4a79c1632ccde5823?frame_id=485620、最終閲覧日 2020 年 8 月 2 日) にて一部の訳を公開しているのでそれに従い、その他のものについては小島 (2017b) に従った。
- 3) 『弁明』10.6；『命題について』第 4 章。ただし後者には偽作の疑いがかかっており、現在もその論争には収束には至っていない。水落 (2006c), 94-97 は真作だとみなしており、他方で Moreschini (2015), 204-218 は偽作だと判定している。
- 4) たとえば、アウグスティヌス『神の国』8.12。
- 5) Dillon (1977), 307-311 及び Harrison (2000), 38 を参照。また、小島 (2017a), 35-36、及び Roskam (2017), 156-157 を見ると、より多くの批判が引用されている。
- 6) Swain (2004), 12. これが最も苛烈かつ主観的な中傷であるように思われる。
- 7) 小島 (2017a) が述べるように、そのように論難する学者たちが「哲学者」や「ソフィスト」を定義して使っているわけではないので、水掛け論にな

ってしまっている感が否めない。Roskam (2017), 158 はそうした学者たちの態度を批判しつつ、「それら〔現代の学者たちがアプレイウスを特徴づけるために用いる過度に単純化されたレッテル〕はむしろ古代においても共通であったソフィストと哲学者の素直な対立を前提とし、引き継いでいる。アルキノオスは、たとえば、彼の *Didaskalikos* の中で哲学者とソフィストを明確に区別している。仮にある日彼がアプレイウスの名人的な演説を聴くために劇場に來たならば、十中八九彼は哲学者よりもむしろソフィストを聴いていたのだと結論付けたことだろうし、聴衆のうちの多くが彼に同意したことだろう。しかしながら、残りの人たちはアプレイウスを雄弁な哲学者、つまりピロストラトスの言葉で言えば、「哲学を追求するけれどもソフィストに位置づけられる」これらの人たちのうちの一人だと考える準備があったことだろう」と同時代においても用法が揺れていることを指摘している。

- 8) *Second Sophistic* の訳語は「第二次ソフィスト運動」、「第二次ソフィスト思潮」さらには「第二のソフィスト術」など未だ定まっているとは言い難い。この語は元来ピロストラトス『ソフィスト列伝』に見られる *ἡ δευτέρα σοφιστική* という言葉が起源となっている。それゆえ、本来は最後の「第二のソフィスト術」というのが一番ピロストラトスの用法には適することになる。しかも、彼は単にゴルギアスやプロタゴラス、イソクラテスなどのアテナイ黄金期に隆盛した古代のソフィスト術と彼と同時代のソフィスト術を区別しているにすぎず、さらに彼が用いる「ソフィスト」という語には基本的に否定的な響きはない。堀尾 (2014) を参照。しかしながら、近年は *Second Sophistic* という語がピロストラトスが報告するところの同時代のソフィストたちの技術ではなくむしろ幅広くその運動や思潮のほうを指す場面がより多く見られる。これにならって本論文においては「第二のソフィスト術」を採用せず、納富 (2014) が用いる「第二次ソフィスト思潮」を採用する。
- 9) 約 700 年に渡るプラトン主義を「中期」と「新」で区分するのは、確かに便利ではある。しかし、あくまでこれは後世の区分であって、それぞれの哲学者たちがそうした自覚をもって哲学していたわけでは決していないことは念頭に置かねばならない。そして先述の通り、哲学の定義が曖昧なままソフィストであるとか哲学者であるとかないとかの判定を下す時代がしばらく続いていた。
- 10) 中畑 (2007), 474。

- 11) 中期プラトニズムが専ら哲学史の文脈で論じられるのに対して、第二次ソフィスト思潮は歴史学の観点からもかなりアプローチされている。第二次ソフィスト思潮に関する歴史学の成果については、南川（1993）、桑山（2008）を、特にアプレイウスについては本間（2015）を参照。
- 12) 元来この語が指すのはギリシア語の著者たちの活動のことである。他方で、アプレイウスはギリシア語のテキストのラテン語翻訳（プラトン『パイドン』を翻訳したことで知られるが、現存はしていない。また『ソクラテスの神について』11.5ではホメロスの部分訳を披露している。ラテン語への翻訳の困難さについては、『黄金の驢馬』1.1.1でも語られている）など両言語を横断する活動を行っていた。事実、南川（1993）、102や本間（2015）、50-51が指摘するように、第二次ソフィスト思潮はギリシア語に限らずラテン語にまで及んでいた。それゆえ本論文では、アプレイウスも第二次ソフィスト思潮の中で活躍していたものと扱うこととする。
- 13) 高津／田中（1963）、88。
- 14) 南川（1993）、91。
- 15) ソフィストが蔑称として扱われているのは、哲学史においてプラトンが勝利をおさめてしまったことが大きな原因であるように思われる。だが、やはりこの点についてもそれぞれの時代のそれぞれの人がどのようにソフィストについて考えていたのかを冷静に議論しなければならない。田中（1987a）を参照。
- 16) ピロストラトスの元の表現にはこのような価値判断は含んでおらず、後世の学者たちが低い価値評価を与えていったに過ぎない。堀尾（2014）を参照。
- 17) 本邦における成果としては、小池他（編）（2019）『『英雄伝』の挑戦——新たなブルタルコス像に迫る』が挙げられる。
- 18) Fletcher（2014）. Impersonation は元は演劇について用いられる概念である。これを哲学に転用することで Fletcher はアプレイウスによる捉えがたい哲学の方法を説明しようと試みている。Impersonation は「役割を演ずること」というのが直訳に近く Fletcher の用法を外していないが、恐らく「ペルソナ（persona）に入り込む（in）こと」と考えると少し理解しやすいかもしれない。哲学を演じること、つまりは哲学の声を借りて代弁することと言い換えてもよい。これは何か具体的な教説ではなく、アプレイウスの作品を一貫するメタ哲学的な方法論のことである。いわゆるソフィストが哲学者を偽装するといったことではなく、それぞれの哲学者がそれぞれが

属する学派の声を代弁するといったようなことを指している。その意味で哲学者は哲学を「演技」しているのであって、Fletcher (2014), 17においてこの概念は「まさに哲学の伝統それ自体に宿っている本質を表すためにも使われることができる」述べている。プラトンにおいてもソクラテスが何かに仮託して語っている箇所をいくつか見出すことができる(『クリトン』48A, 50C ff.)。その最たるものは、『ゴルギアス』482A-Bであろう。カリクレスが冗談かと疑うようなソクラテスの発言は哲学が言っていることなのだと彼は語る。さらに Eweden (2018) によれば、これはカリクレスによる“*περισυλᾶσθαι πᾶσαν τὴν οὐσίαν*”という発言——通例の翻訳では「全財産を剥ぎ取られる」となるが、それよりもむしろ「全存在を奪われる」と解釈されるべき——と呼応する。男らしさや率直さが強いカリクレスは彼の自己が肥大化してしまう。他方でそれらが弱いソクラテスは自己が弱まり、結果的に自己を哲学に引き渡しきってしまうのだ。Eweden (2018) の見解は Impersonation を突き詰めた先のものに最接近するかもしれない。しかしながら、もしかするとそれが実際に近づくのは Impersonation よりもむしろ Impersonality (非人称、「客観性の主張、あるどこからでもないところからの眺め」) のほうかもしれない(この2つを Fletcher は区別しているのにも拘らず)。この Impersonation of Philosophy については今後の課題としたい。

- 19) Moreschini (2015).
- 20) Stover (2016). ちなみに、偽作の疑いのある『命題について』も第3巻とする説もあるので、失われた第3巻として2つの著作が名乗りをあげているという、奇妙な状況になっている。
- 21) Magnaldi (2020).
- 22) 瀬口 (2019), 189 は「プルタルコス・ルネサンス」と述べているので、ひょっとすると「ミドルプラトニズム・ルネサンス」というように、範囲を広げてもよいのかもしれない。
- 23) 特に、May (2010)、May (2013) 4-9 を参照。
- 24) Drake (1968), 108.
- 25) Walsh (1970), 177.
- 26) 『バイドン』118A.
- 27) Keulen (2006), 31. なお、プラトンによればソクラテスはとても酒に強い。『饗宴』を参照。
- 28) Littlewood (2019)。ソクラテスは絶倫な性欲をもっていたとの風評もあった。

たので（田中（1986b）、第二章「生活的事実」によれば、2人の妻を持っていたとの説から発生したと考えられる）、諷刺するならば格好のネタであったと言える。

- 29) クセノポンのソクラテスは、プラトンのソクラテスに比べてしまうと平凡な道徳を説く教育者だという印象を免れないが、むしろクセノボンとそのソクラテスが凡庸である分だけ歴史的なソクラテスを描写していると考えられた時期もあった。納富（2017）、130–131を参照。岩田（2014）、15–20は極めて否定的にクセノボンを見ている。
- 30) 彼らはポリュクラテスというソフィストの『ソクラテスの告発』へのカウンターとしてそれぞれ『ソクラテスの弁明』を書いた。納富（2017）、第3章「ソクラテスの記憶」及び第4章「ソクラテス裁判をめぐる攻防」を参照。
- 31) アリストパネスのソクラテスについては、田中（1988）、岩田（2014）、納富（2017）を参照。
- 32) 諷刺詩の起源について、キンティリアヌス『弁論家の教育』10.1.93を参照。
- 33) Littlewood（2019）、369。
- 34) 以下、引用はすべて拙訳である。底本は文献表でメインテキストとして示したものを使用し、底本と異なる読みを取る場合にはその都度注記する。
- 35) Burnet版及び有力写本の読み（ὥστε γε）に従わず、多くの注釈者の読み（ὥς γε）に従う。藤澤（2001）、研究用註63のとおり、ΩΣΤΕとΩΣΤΕの混同と考えられる。よってτεを削除し、ὥς c. *inf.*の構文で解する。
- 36) Trapp（1990）、141。この論文では紀元後2世紀の作品に見られる『パイドロス』のイメージが列挙されている。他方でBaltzly & Share（2018）、4はヘレニズム期及び初期帝政期において「ポピュラー」であったと述べており、その評価は肯定的ではない。いずれにせよ、読みやすそうでありながら何が実際には主題なのかが霞んでしまっているこの『パイドロス』のつかみにくさが古人たちをも魅了したことは確かであり、そのテーマをつかみ損ねてしまったがためにプラトンの処女作であるとの説も生まれたのだろう。この説は古代において広く信じられていたけれども（たとえばディオゲネス・ラエルティオス『列伝』4.1.38など参照）、19世紀以降の文献学の成果によって明確に否定されている。
- 37) 呉／国原（2013）、512は『パイドロス』をもアプレイウスがラテン訳を行ったとしている。その一方で、『パイドロス』のラテン語訳としては、

Allen (2008), xii によれば、1423 年にアウリスパとトラヴェルサーリがビザンティンからプラトン全集を持ち込んだその 1 年後にレオナルド・ブルーニが 257C まで『パイドロス』を翻訳しており、フィチーノによるラテン語プラトン全集に先立つ『パイドロス』の翻訳としてはそれが唯一のものとされている。

- 38) 写本及び Moreschini (1991) の校訂 (*modicum fluentum*) に従い、Magnaldi (2020) の新校訂 (*modicum fluenti*; あえて逐語訳すると「イリスス川たる流れの穏やかなもの」) には従わない。前者の強みは写本の読みを保持できることにある。その一方で、後者の強みは 1.6 及び 9.4 における形容詞の中性形+名詞の属格との一貫性を保てることとである。恐らく現存するすべての写本より以前に(読みやすい、あるいは直前の語の格変化に引かれて) *fluentum* に誤って書き替えられたと推測しているのだろう。確かに、書き写す際により簡単な読みに書き間違えることはあっても、より難しい読みに書き間違えることは少なそうに思える。いずれの読みでも通例では複数形で用いる中性名詞 *fluentum* が単数形で用いられているという難点は解消されない。筆者は *amnis* と *fluenti* の名詞の属格が連続することが(これらが同格で用いられているとはみなせるものの)不自然であることと、写本の読みを保持できることから Moreschini (1991) に従う。
- 39) Winkle (2018) を参照。アグノスとは、日本ではセイヨウニンジンボク、イタリアニンジンボク、チェストツリーなどと呼ばれる、紫や白の香りある花をつける地中海地方原産の低木のこと。低木といっても 2-8m ほどの樹高になるらしい。たしかにそれなりに大きくないとその影でソクラテスたちは安らげないように思われる。
- 40) プリニウス『博物誌』XXIV. 38、ディオスコリデス『薬物誌』I. 183。
- 41) Allen (2008), 38-41, 104-105 を参照。
- 42) De Vries (1969), 53-54、脇條 (2018), 15 を参照。
- 43) この逸話については、Rossetti (1980) 及び McLean (2007) も参照。
- 44) ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』2.9.105 によれば、『ゾピュロス』と『シモン』がエリスのパイドンの真作だと報告されている。哲学的にはいわゆる小ソクラテス学派のうちの 1 つであるエリス学派の開祖とされる。この人物と『パイドン』の舞台設定については、納富 (2017) 第 1 章「ソクラテスの死」を参照。
- 45) キケロ『運命について』10、『トゥスクルム荘対談集』4.80 及びアプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』171.7-15 [『運命について』

（＝近藤／杉山訳, 17-18 頁）を参照。

- 46) 『トウスクルム荘対談集』4.80。
- 47) アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』171.15。
- 48) 納富（2017）, 29。
- 49) 近藤／杉山（2014）, 17-18 注 72 を参照。
- 50) May（2013）, 31。
- 51) プラトン『ソクラテスの弁明』28E 及び『クリトン』52B を参照。
- 52) これまではより一般的でありかつアブレイウスが使用しているため「テッサリア」と表記してきたが、プラトンの文章はアッティカ方言で書かれているため、プラトンの引用の場合のみ「テッタリア」の表記とする。
- 53) ここでのソクラテスに対する賞讃は、『国家』第 10 巻 607A で語られる「優れた人々への讃歌」に該当するがゆえに「作家」（ποιητής）であるとの非難を免れるのではないかと筆者は考えている。しかし、これほどにわかりづらい「解毒剤」を用意していること、また『国家』との関連性については今後の課題としたい。
- 54) May（2013）, 32。
- 55) アブレイウスの「哲学のすすめ」については、小島（2017a）を参照。
- 56) Kahane & Laird（2001）。
- 57) Trapp（2001）, 40-41。
- 58) *Ibid.* 41。
- 59) ここで言及されるセクストスは、皇帝マルクス・アウレリウスの教師であったアカデメイア派のセクストスであるとされている。彼は懷疑主義者のセクストス・エンペイリコスと同定されることもあるが（『スーダ』など）、その同定は誤りとされることのほうが多い。
- 60) Kirichenko（2008）, 95。
- 61) 逆接の接続詞で『黄金の驢馬』という長い小説が始まることは注目に値する。Too（2001）, 179 が指摘する通り、これによってまるで話の途中から始まっているかのような印象を読者に与えている。de Jong（2001）, 202 や Keulen（2007）, 63 が述べるように、At をギリシア語の ἄλλὰ に相当するものだと考えた場合、クセノポン『饗宴』及び『ラケダイモン人の国制』が参考になる。だが文法書で説明されるような、開幕の ἄλλὰ の互換よりも、de Jong（2001）, 203-204 が提示するように、『ピレボス』や『ヒッピアス小』、『クラテュロス』といった話の途中から始まるプラトンの対話篇と比較するほうがより有意義であるかもしれない。

〈メインテキスト〉

- Burnet, J. (1901). *Platonis Opera*, II. Oxford Classical Texts. Oxford University Press.
- Magnaldi, G. (2020). *Apulei Opera Philosophica*. Oxford Classical Texts. Oxford University Press.
- Zimmerman, M. (2012). *Apulei Metamorphoseon Libri XI*. Oxford Classical Texts. Oxford University Press.

〈翻訳〉

- 呉茂一／国原吉之助 (2013) 『黄金の驢馬 アープレイユス作』、岩波書店。
- 田中美知太郎／藤澤令夫 (編) (1974-78) 『プラトン全集』、全 17 巻、岩波書店。
- 脇條靖弘訳 (2018) 『パイドロス』、京都大学学術出版会。

〈参考文献〉

- Allen, M. J. B. (2008). *Marsilio Ficino. Commentaries on Plato Volume 1: Phaedrus and Ion*. Harvard University Press.
- Baltzly, D., & Share, M. (2018). *Hermias: On Plato: Phaedrus 227A-245E*. Bloomsbury USA Academic.
- Beaujeu, L. (1973). *Apulée. Opuscules philosophiques, Fragments: Du Dieu de Socrate - Platon et sa doctrine - Du monde*. Les Belles Lettres.
- De Jong, I. F. (2001). The Prologue as a Pseudo-Dialogue and Identity of its (Main) Speaker, In Kahane, A., & Laird, A. (Eds.), *A Companion to the Prologue of Apuleius' Metamorphoses*. Oxford University Press, 201-212.
- De Vries, G. J. (1969). *A Commentary on the Phaedrus of Plato*. Adolf M. Hakkert.
- Dillon, J. (1997). *The Middle Platonists: 80 B.C. to A.D. 220*, revised edition with a new afterword, Duckworth.
- Drake, G. (1968). Candidus: A unifying theme in Apuleius' *Metamorphoses*, *The Classical Journal* 64-3, 102-109.
- Ewgen, S. M. (2018). A Man of No Substance: The Philosopher in Plato's *Gorgias*. *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 31-1, 95-112.
- Fletcher, R. (2014). *Apuleius' Platonism: The Impersonation of Philosophy*. Cambridge University Press.
- Graverini, L. (2003). The Winged Ass, Intertextuality and Narration in Apuleius'

- Metamorphoses*, In Panayotakis, S., Zimmerman, M., & Keulen, W. (Eds.), *The Ancient Novel and Beyond*, Brill, 207–218.
- Hackforth, R. (1952). *Plato's Phaedrus*. Cambridge University Press.
- Harrison, S. J. (2000). *Apuleius: A Latin Sophist*. Oxford University Press.
- Harrison, S. J., Hilton, J., & Hunink, V. (2001). *Apuleius: Rhetorical Works*. Oxford University Press.
- Henderson, J. (1998). *Aristophanes, Clouds. Wasps. Peace*. Harvard University Press.
〔田中美知太郎訳（1989）『雲』、『田中美知太郎全集』22、筑摩書房、235–331 頁。橋本隆夫訳（2008）『雲』、『ギリシア喜劇全集』1、岩波書店、209–321 頁。〕
- Hijmans, B. L. (1987). Apuleius, Philosophus Platonicus. *Aufstieg und Niedergang der Roemischen Welt* 36. 1, De Gruyter, 395–475.
- Jones, C. P. (2017). *Apuleius: Apologia Florida De Deo Socratis*. Harvard University Press.
- Keulen, W. H. (2007). *Apuleius Madaurensis Metamorphoses: Book I: Text, Introduction and Commentary*. Egbert Forsten.
- Kirichenko, A. (2008). *Asinus Philosophans: Platonic Philosophy and the Prologue to Apuleius' Golden Ass*, *Mnemosyne* 61, 89–107.
- Littlewood, C. (2019). Socrates in Roman Satire, In Moore, C. (Ed.), *Brill's Companion to the Reception of Socrates*, 367–398.
- May, R. (2013). *Apuleius Metamorphoses or The Golden Ass Book 1*. Oxbow Books.
- McLean, D. R. (2007). The Socratic corpus: Socrates and physiognomy. In Trapp, M. (Ed.), *Socrates from Antiquity to the Enlightenment*. Routledge, 65–88.
- Moreschini, C. (1991). *Apulei Platonici Madaurensis Opera Quae Supersunt: De Philosophia Libri*. De Gruyter. 〔國方栄二訳（2008）『プラトンとその教説』、中畑正志（編）『プラトン哲学入門』、京都大学学術出版会。〕
- (2015). *Apuleius and the Metamorphoses of Platonism*. Brepols Publishers.
- Roskam, G. (2017). Cupid's Swan from the Academy (*De Plat.* 1. 1, 183): Apuleius' Reception of Plato, in Tarrant, H., Layne, D. A., Baltzly, D. & Renaud, F. (Eds.), *Brill's Companion to the Reception of Plato in Antiquity*, 156–170.
- Rossetti, L. (1980). Ricerche sui 'Dialoghi Socratici' di Fedone e di Euclide. *Hermes* 108, 183–200.
- Rowe, C. J. (1986). *Plato: Phaedrus*. Aris & Phillips LTD.
- Ryan, P. (2012). *Plato's Phaedrus: A Commentary for Greek Readers*. University of

- Oklahoma Press.
- Sharples, R. W. (1983). *Alexander of Aphrodisias: On Fate*. Duckworth.
- Stover, J. A. (2016). *A New Work by Apuleius: The Lost Third Book of the De Platone*. Oxford University Press.
- Too, Y. L. (2001). Losing the Author's Voice: Cultural and Personal Identities in the *Metamorphoses* Prologue, In Kahane, A., Laird, A. (Eds.), *A Companion to the Prologue of Apuleius' Metamorphoses*. Oxford University Press, 177–187.
- Trapp, M. B. (1990). Plato's *Phaedrus* in Second Century Greek Literature, In Russell, D. (Ed.), *Antonine Literature*. Oxford University Press, 141–173.
- (2001). On Tickling the Ears: Apuleius' Prologue and the Anxieties of Philosophers, In Kahane, A. & Laird, A. (Eds.), *A Companion to the Prologue of Apuleius' Metamorphoses*. Oxford University Press, 39–49.
- (2007). Beyond Plato and Xenophon: some other ancient Socrateses, In Trapp, M. (Ed.), *Socrates from Antiquity to the Enlightenment*. Routledge, 51–63.
- Walsh, P. (1970). *The Roman Novel*. Cambridge University Press.
- Winkle, J. (2014). Necessary Roughness: Plato's *Phaedrus* and Apuleius' *Metamorphoses*, *Ancient Narrative* 11, 93–132.
- Wright, W. C. (1989). *Philostratus and Eunapius: The Lives of the Sophists*, Harvard University Press. (戸塚七郎／金子佳司訳 (2001)『哲学者・ソフィスト列伝』、京都大学学術出版会。)
- Yunis, H. (2011). *Plato: Phaedrus*. Cambridge University Press.
- 岩田靖夫 (2014)、『増補 ソクラテス』、筑摩書房。
- 桑山由文 (2008)、「元首政期ローマ帝国とギリシア知識人」、『史窓』65、19–32。
- 高津春繁／田中美知太郎 (1963)、『ギリシア・ローマ古典文学案内』、岩波書店。
- 小島和男 (2017a)、「アプレイウスにとっての哲学とは何か?」、『研究年報』64、1–17。
- (2017b)、「アプレイウスによる哲学のすすめ」、『ギリシャ哲学セミナー論集』14、35–48。
- 近藤智彦／杉山和希 (2014)、「アプロディシアスのアレクサンドロス『運命について』日本語訳・注 (1)」、『北海道大学文学研究科紀要』142、1–32。
- 瀬口昌久 (2019)、「実践的な生と伝記の執筆——『英雄伝』の指導者像と哲人統治の思想」、小池登／佐藤昇／木原志乃 (編)『『英雄伝』の挑戦—新たなブルタルコス像に迫る』、京都大学学術出版会、183–211。
- 田中美知太郎 (1987a)、『ソフィスト』、『田中美知太郎全集』3、筑摩書房、3–

146 頁。

——（1987b）、『ソクラテス』、『田中美知太郎全集』3、筑摩書房、147-300。

——（1988）、『『雲』のソクラテス』、『田中美知太郎全集』7、筑摩書房、104-120。

中畑正志（2007）、「プラトン哲学・アリストテレス哲学の復興」、『哲学の歴史』2、中央公論新社、468-491。

——（2008）、「総解説：プラトンを読む——昔も、そして今も」、中畑正志（編）『プラトン哲学入門』、京都大学学術出版会、423-449。

納富信留（2014）、「『ソフィスト思潮』とは何か?」、『ギリシャ哲学セミナー論集』11、41-51。

——（2017）、『哲学の誕生—ソクラテスとは何者か』、筑摩書房。

藤澤令夫（2001）、『藤澤令夫著作集 IV——プラトン『パイドロス』註解』、岩波書店。

堀尾耕一（2014）、「哲学的弁論術と第二のソフィスト術」、『ギリシャ哲学セミナー論集』11、1-15。

本間俊行（2015）、「五賢帝時代における教養人と都市社会：アプレイウスの『弁明』を手がかりに」、『西洋史研究』44、51-74。

水落健治（2006a）、「アプレイウスにおけるアリストテレス論理学とストア論理学」、『新プラトン主義研究』5、49-64。

——（2006b）、「[翻訳] 命題について（マウダラの人ルキウス・アプレイウス）」、『新プラトン主義研究』5、65-89。

——（2006c）、「[解説] アプレイウスと『命題について』」、『新プラトン主義研究』5、91-103。

南川高志（1993）、「ローマ帝国とギリシア文化」、藤縄謙三（編）『ギリシア文化の遺産』、南窓社、77-108。

Socrates of Apuleius' *Golden Ass* and Platonism

KUKI, Yasuhiro

The main aim of this article is to read Apuleius' *Golden Ass* in the Platonic philosophy. In this novel, the character whose name is 'Socrates' is killed by Meroe, the Thessalian witch. His death that happens under the plane tree and by the river reminds readers of Plato's *Phaedrus*. Socrates in the *Golden Ass* turns out spoiled by the absence of Agnos tree and fictional character by his presence at Thessaly. This article demonstrates that through the anecdote reported by Phaedo of Elis, the exile to Thessaly in Plato's *Apology* and *Crito*, and the description of Socrates in Apuleius' *On God of Socrates*, Apuleius' Socrates also encourages philosophy. Moreover, the ambiguous method of Apuleius appears in Prologue of the *Golden Ass*, which makes readers recall criticisms of written words in Plato's *Phaedrus*. This article shows that we can call Apuleius Platonic philosopher rather than Platonic writer because his works are 'very fine amusement' in Plato's *Phaedrus*.

(哲学専攻 博士後期課程 2 年)